

主 題：信仰の成長を目指して④「喜びにおける成長」

聖書箇所：ピリピ人への手紙 4章4節

今朝はピリピ4：4をお開きください。皆さんがよくご存じのみことばをお読みします。「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」。

☆喜びを持って歩み続ける方法

① パウロの命令：喜びなさい

「喜びなさい」という命令をパウロが与えました。実はこのことばは新約聖書の中に74回も出てきます。この命令をパウロはピリピの教会の兄弟姉妹たちに送りました。時制を見るならば、これは継続して喜び続けて行くということです。きょう私たちが皆さんと一緒に考えたいことは、どうしたらパウロやそれ以外の多くの信仰の勇者たちと同じように、この「喜び」を持って生きることができるのかということです。パウロはこの命令を与えたわけであり、ピリピのすべてのクリスチャンたちが神様の与えてくださる「喜び」を持って生きることが望んでいました。これから見るその「喜び」というのは、この世が与える喜びとは全く違うものです。パウロはⅡコリント6：10で、「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり」と言っています。彼が教えている、彼が命じている「喜び」というのは、たとえ悲しみの中にいたとしても、揺るぐことのない「喜び」です。消えてなくなってしまうような「喜び」ではなくて、たとえ悲しみのどん底にあったとしても、心の中にあり続ける「喜び」、パウロはここでその話をするわけです。

実際、パウロ自身がそうでした。ピリピ1：12や30には、パウロ自身が大変な迫害を受けていたという、彼自身の証が載っています。また1：13では、彼は信仰ゆえに投獄されていたことを証しています。4：14には彼がさまざまな困難を経験していたことを教えます。そしてローマで捕えられていたパウロはいつ自分の首がはねられてしまうかわからない、そしてそのことが確実に近づいているというような殉教の現実の中にいたわけです。そのような状態でパウロがピリピの教会の人たちに送ったメッセージは、「いつも主にあって喜びなさい」でした。パウロはこのことを強調しました。

② なぜパウロがこの命令を与えたのか。

私たちは次のようなことを推測することができます。それはすべてのクリスチャンたちに、あなたはパウロ自身が持っていた、この「喜び」を持って生きることができるということを改めて教えるためです。

同時にあなたが「喜び」を持って生きて行くことがいかに大切であるかをパウロは教えようとするのです。なぜかというと、あなたがこの主の「喜び」を持って歩んでいるならば、あなたはその「喜び」を与えてくださる神様のすばらしさを世に証しして行くからです。まさに栄光を現わし続けて行く生き方を実践することになるからです。でもパウロ自身、「喜び」続けることがいかに難しいか、そのこともよく知っています。現実を見た時に、私たちの周りの救われている皆さんすべてがこの「喜び」を持って生きているかということ、そうでないことを我々は知っています。難しい顔をしている人もいるし、しかめっ面の人もいます。そういう人はもう一度この神様の言われていることに目を向けないといけません。先ほどもお話ししたように、あなたがこの神様の「喜び」を持って歩み続けて行く時に、あなたは神の栄光を現わして行くわけです。ということは、もしそうでなかったら、神の栄光を現わすことにならないということになります。皆さんもよくご存じのように、Ⅰテサロニケ5：16でも「いつも喜んでいなさい。」と、パウロは同じような命令を与えます。これは神の命令です。私たちがいつも喜んでいないとすれば、我々は神の命令に従っていないことになり、しかも神の命令に背くことになるのです。

先ほども言ったように、いつも「喜び」続けて行くということが非常に難しいことは、皆さんも経験して来られました。でも、パウロはそのことを実践したのです。パウロはいつも「喜び」続けたのです。だから我々はそのような生き方をしていたパウロに、どうやったらそういうふう生きられるのですか、どうやったら私たちもあなたと同じようにいつも「喜び」を持って生きることができるのですかと聞いてみる必要があります。その問いかけに対してパウロ自身が答えてくれているのです。きょう私たちは、どうしたらパウロと同じように「喜び」を持って歩み続けて行くことができるのか、そのことをこのみことばを通して一緒に見て行きます。

A. 喜びの定義

この学びをするに当たって、私たちが最初にしなければいけないのは、この「喜び」ということばの定義をすることです。どういう意味なのかということです。

1. この世の定義

私たちが一般的に「喜び」ということばを調べると、広辞苑は「喜ぶこと、うれしく思うこと、またその気持ちである」と言います。またこんなふうにも説明されています。「よいことに出会って快い」とか「楽しい」とか「うれしいと思う」とか、これが喜びだと言うのです。心が何かうきうきしているような、私たちの感情や我々の気持ちを表わすことばです。確かに辞書ではそのように定義するのです。それで、多くのクリスチャンたちはそういう喜びを持って生き続けて行かなければいけないのだと思って、一生懸命努力したけれども、残念ながらいつもそのような状態に自分の心を保つことができない。なぜなら悲しいこともつらいこともいっぱいあるからです。私たちはいつも喜べない状況に出会うわけです。だから自分の心がいつもそのような状態でないことを我々も知っているし、そのようなことを経験して来た。そうすると我々にしてみたら、こんな命令は難し過ぎますパウロ、守れません、できませんと言ってしまうがちです。

2. 聖書的定義

どうしたらいいのか——。我々はパウロがどういう意味でこの「喜び」ということばを使っているのか、聖書の定義を見ることです。辞書を見ると、「幸せや満ち足りている状態を喜ぶことである」と定義しています。何を言っているかという、クリスチャンである私たちはもう既に主によって与えられたすばらしい状態を持っている、別の言い方をすれば、我々はもう既に神様からすばらしい祝福をいただいでいて、それを覚えなければいけないというのです。今私たちは辞書を通して見て来たのですが、そういったことを全部含めて聖書の教える「喜び」とはどういうものなのかという定義をお話しします。

「喜び」というのは主からの賜物です。そして主への信頼によって主からもたらされる祝福です。ですから私たちの努力でかち取ったり、心や意思を鍛えることによって決して得ることのできないものです。我々は心が感情的に喜びに満たされるようにしようとして来たのですが、いつも失敗に終わりました。いつも失望に終わりました。そんなことは私たちにできないからです。パウロが、そしてみことばが私たちに命じているのはそんなことではないのです。この「喜び」というのは神様からのプレゼントなのです。神の賜物なのです。しかもその賜物は、主を信頼する人に主が与えられるものなのです。あなたが主を信頼しているならば、主があなたに与え続けてくれるものなのです。

実際にそのように歩んでいたパウロや使徒たちが、そのような「喜び」を持って生きていたことが、使徒の働きのみことばの中に記されているので、まずそこを見てみましょう。

① 迫害者とパウロ 使徒 16 : 25

一つ目はパウロが実際にピリピの町を訪問した時の話です。その時の様子が使徒 16 章に出てきます。占いの霊に憑かれた女奴隷からその悪霊を追い出した後、彼女を使ってもうけを得ていた主人がパウロたちを訴え出たわけです。それで彼らは捕えられ、着物をはがれてむちで打たれ、そして牢に入れられました。そのことが使徒 16 : 23 に出て来ました。「何度もむちで打たせてから、ふたりを牢に入れて、看守には厳重に番をするように命じた。」そして 25 節「真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると、ほかの囚人たちも聞き入っていた。」と。つい数時間前、パウロたちはむちで打たれたのです。痛みが残っていたでしょう。出血も見られたでしょう。そのような痛みの中で彼らが何をしたのか。神様に不平不満を言っていたのではないのです。彼らは主をほめたたえていたのです。そのような状況にあっても、彼らのうちにある「喜び」は賛美という形になって表われました。

② 迫害者と使徒 使徒 5 : 40-42

また同じ使徒の働きの 5 章にも迫害を経験した人たちの様子が記されています。使徒 5 : 40-42 「:40 使徒たちを呼んで、彼らをむちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと言いつつ釈放した。:41 そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。:42 そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。」と。パウロだけではなかったのです。ほかの人たちも大変な脅しを受け、迫害を受けたにもかかわらず、彼らはその中で喜んでいたのでした。

そんな「喜び」の話をパウロはしているのです。喜ぶ時に喜び、そうでない時に喜ばない。そんなこの世的な、この世の人々が話す喜びとは全く違う「喜び」の話をしているのです。先ほどの II コリント 6 : 10 「悲しんでいるようでも、いつも喜んで」と、悲しみの中で喜ぶことができる、そんな「喜び」の話です。この II コリント 6 : 10 は感謝ですよ。みことばは私たちに悲しんではいけないとは言っていないのです。悲しむことはいっぱいあるし、つらいこともあるのです。でも感謝なことは、その中にあって、神が下さった「喜び」がしっかりと私たちの心の土台を占めている。そのような信仰者としての歩みをあなたは生きることができるのです。

B. 喜びを得る方法

定義を見た後、ではどうしたら我々はその「喜び」を得ることができるのか。「喜び」を得る方法について今から二つのことを見ます。

1. 救いに与ること

一つは簡単なことです、救いに与ることです。主イエス・キリストによって罪の赦しを受けていない人はこの「喜び」を経験することはありません。ペテロが I ペテロ 1 : 8 で「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。」と言っています。ペテロは救われた人の特徴をこう表わしています。イエス様によって罪赦された人は、イエス様を見たことはないけれども、イエス様のことを愛しているし、イエス様のことを信じているし、そしてその心はことばで表現できない「喜び」に満たされていると。これがクリスチャン、救われた者たちの特徴です。ですから我々がこのような「喜び」を持って日々歩み続けて行くためには、まず主イエス・キリストの贖いのみわざ、救いをいただいでなければ、この「喜び」を経験することはいけません。

2. 主の前を正しく歩むこと

二つ目は主の前を正しく歩み続けて行くことが必要です。この「喜び」というのは神の賜物であり、神から与えられる祝福であると定義しました。その祝福をいただき続けて行くためには、神がお喜びになるように生きて行くことが必要だからです。神の前を正しく歩んで行くなれば、神様は約束された祝福を与え続けてくださる。ですから、この祝福を自分のものとして日々生きて行くためには、間違いなく神の前を正しく歩んで行くことが必要です。

なぜそれが大切かというと、ダビデが私たちに次のようなことを教えてください。詩篇 16 : 11 「あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」と。ダビデは主よ、「あなたの御前には喜びが満ち」あふれていますと言うのです。神のもとにこのすばらしい「喜び」があるのです。ですから私たちがその「喜び」をいただくならば、この主の「喜び」を持って、私たちは「喜び」続けて行くことができる。だからその神が喜ばれることを私たちは日々行ない続けて行くことが必要なのです。なぜみこころに従うことがそれほど大切なのか——。主が喜ばれることだからです。みことばを聞き、そのみことばに従っていこうとする。なぜそうするのか——。主がお喜びになることだからです。そしてそのような歩みをする者に、主はこの祝福を約束してくださった。あなたが「喜び」に満たされ続けて行くというすばらしい祝福です。

まず私たちが覚えておかなければいけないことは、信仰者の皆さん、あなたはこの神様の祝福を、この神の「喜び」をいただいたのです。ひょっとしたら今その「喜び」を持っていないかもしれない。どこかに落としてきたかもしれない。どうしたらいいのか——。それはこれから見て行きます。でもペテロが言ったように、少なくともイエス・キリストの救いに与った皆さんには、主イエス・キリストが救ってくださったあなたにはこの約束が与えられたのです。主が神様の「喜び」を信じるひとりひとりに与えてくださった。問題はそれをどのように維持していくのかです。

パウロはきょう私たちに「喜びなさい」と言いました。こんな命令を与えたのは、喜ぶことができるからです。このことが命じられているのは、このことを実践できるからです。だから、パウロはこのように命じているのです。

C. 喜びを失う方法

さて、どうやったらこの「喜び」を維持することができるのかを見て行く前に、どうやったらこの「喜び」を失うのかということと一緒に考えてみましょう。「喜び」を失う方法は二つあります。

1. 主への信頼を失う

一つは主への信頼を失うことです。主を信頼することによって「喜び」を得るのであれば、その信頼を失うことによって「喜び」を失います。

2. 自分の判断に頼る

二つ目に言えることは、主ではなくて、自分の判断に頼ることです。私がどう見るか、私がどう考えるか、このような考え方に立った時に私たちは「喜び」を失ってしまいます。だって我々が日々いろいろなことを経験する中であって、「神様、なぜこんなことをなさったのですか?」、「私はそんなことは承認できません。」、「私はこれを受け入れることができません。」、「神様、これは私が望んでいたことではありません、お願いしたことと違うではないですか?」、こういう態度をもって神様に向かう人たちは、確実にその時点で「喜び」を失っています。なぜなら、その人は自分がどう思うかということによって周りに起こっているすべてのことを判断しようとしているからです。

箴言の中でソロモンは、私たちが非常に考えなければならないことを言っています。箴言 14 : 12 「人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。」とあります。この「まっすぐに」ということばは正しいという意味があります。人にとって正しいと思える道があると言っているのです。でもその道を選択するならば、それがみこころでない場合、その行き着くところは「死の道」であると。つまり神様のみこころではなくて自分の考えに従って行こうとするならば、そこには何の祝福もないと

いう話です。だから私たちが神様の「喜び」をいつも「喜び」ながら生きて行こうとするのなら、私たちの願いではなくて、私たちの思いではなくて、私たちの考えではなくて、主を信頼しながら主のみこころに従って行くことです。その時に主はこの約束を私たちのうちになんてくださるのです。ではなくて、あなたの自分勝手な思いに従って歩いて行くなれば、そこに神の祝福はないとみことばははっきりと教えます。

D. 喜びを維持し続ける方法

最後に私たちが見ておきたいのは、ではどうしたら「喜び」を維持し続けることができるのか、いただいた「喜び」を維持し続ける方法です。

もう一度きょうのテキストを見ていただくと、「いつも主にあって喜びなさい。」とあります。最初にもお話ししたように、みことばの教えている「喜び」というのは、私たちがどんな気持ちで自分の心を保ち続けるかという話ではなく、あくまで主によって与えられるものです。主が「喜び」の原因なのです。あなたがいつも「喜び」続けていくためには、主の助けがなければならぬのです。私たちが定義を通して学んで来たように、主に信頼することが必要だということを実はみことばは私たちに教えてくれるのです。

ローマ8：38-39「：38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、：39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」は、イエス・キリストによって救われた者は決して救いを失うことがないという永遠の保証をパウロが明確に教えている箇所です。この38節の初めに、パウロは「私はこう確信して」といっていました。これは信じるということばです。つまり主によって贖われた者たちは救いを失うことがない、そのことを私は信じている、そのことを私は確信しているという神様に対する強い信頼の告白なのです。彼がどう思うかではなく、そのように神が約束された、私はそれを確信していると。その信仰の姿勢なのです。神が言われたことを私は信じ続けるのだという強い信仰の姿勢、そのことがここに表われているのです。

その上で、皆さんよくご存じのローマ8：28「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益とさせていただきますことを、私たちは知っています。」とあります。最後のところに「知っています」という動詞が出て来ました。非常に興味深いことばを使っています。このことばは、ただ何となく知的に知っているというのではないのです。自分が実際に見たり、実際に目撃をしたり、また実際に見ることによってあることを理解するとか、解釈をするとか、そのことに気づくとか、そういう意味を持ったことばなのです。だからパウロがここで言った「知っている」というのは、ただ何となくそういう知識を蓄えたということではなくて、実際の経験を通して、そのような確信を得たということです。すべてのことは私の信仰の成長のために神がなしておられることであり、すべてのことは神の栄光が現わされる機会であるという強い確信を彼は得たのです。パウロはその信仰生活の歩みの中で、私の生活に起こるすべてのこと、それは私の益のためである、つまり私の信仰にとって必要なことであり、私の信仰が成長するためにすべてのことを神様がしてくださっているのだということを強く確信していたのです。

もう一つパウロがこのローマ8：28で告白したことは、神がなさるすべてのことは、神ご自身の御栄を現わすための方法であるということです。私は経験を通してこれを知っている、実際にそのことを見て来て、私はその確信を持っていると言うのです。恐らくヤコブも同じような確信を持っていたのでしよう、彼はヤコブ1：2で「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。」と言っています。苦しいのに、つらいのに、悲しいのに、なぜ、試練を喜べるかです。ヤコブもすべてのことは、自分の信仰の成長のためだとわかっていたのです。すべてのことの背後に神様のすばらしい完全なご計画があるのだということを彼らは知っていたのです。ですから彼らはすべてのことにおいて主に信頼し続けたのです。どんなことがあっても、彼らは主を信頼し続けたのです。だってこのようすばらしい神様のご計画があることを彼らは確信していたからです。

私たちも同じなのです。個人的に今あなたがどんなことを経験しているかはわかりませんが、あなたを愛する神様があなたにそれを与えてくれているのです。あなたはこのレッスンを通して成長するのです。あなたの信仰は成長するのです。そして、もう一つ、このことを通して、神様の栄光があなたを通して現わされて行くのです。そのためにあなたは今経験されていることを経験しているのです。その背後に完ぺきな神様のご計画があります。信頼することです。そしてあなたがそのように信頼する時に、あなたの心にこの神様の「喜び」が与えられ続けていくのです。

先ほどの箴言3：5-6に「：5 心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。：6 あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」とあります。「心を尽くして」というのは、あなたの心のすべてをもってということ。何をしろと言っているか——。「主に拠り頼め」と言っているのです、主に信頼を置きなさいということ。そして「自分の悟りにたよるな」と言うの

です。あなたの考えに頼ってはいけないと言うのです。6節に「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ」と。この「認める」というのは、何となく同意するという意味ではありません。このことばには従順という意味が含まれます。なぜ「行く所どこにおいても、主を認める」のかということは、なぜ主に従いつけるのかとも言うことができます。それは主を知っているからです。主がどんなお方であるかを知っているからです。どんな時でもこの方が私を正しく導いてくれることを知っているがゆえに、主に信頼を置いて主に従いつけて行こうとするのです。このみことばでソロモンはこう言うのです。あなたの心のうちなるすべてをもって主に信頼を置きなさい。自分の考えに頼ってはいけない。あなたの行くところどこにおいても、あなたの日々の生活において、いつも主に従って行きなさいと。なぜなら、あなたは主がどんなお方であるかを知っているから。すばらしい主であり、あなたを愛しておられる主であり、完全な主であり、そしてすばらしい計画を持っておられる主であるから、その方を信頼して行きなさいと。6節後半、「そうすれば（結果です）主はあなたの道をまっすぐにされる」と。主があなたを正しく導いてくれると。

今我々が見ているソロモンの教えていることと、さっき我々が見て来たパウロの教えはどちらも同じことを言っているのです。何があろうとも、あなたの責任は主に信頼して、主に従いつけて行きなさいと。試練がやって来てもそれを喜びなさい、なぜならその背後にすばらしい神のご計画があるからと。いろいろな迫害を経験したとしても、その背後にあなたを成長させようとするすばらしい神のご計画があり、そして神の栄光を現わす機会として、神はその時を用いようとしておられるから、信頼しなさい、そして主に従って行きなさいと。みことばってすばらしいでしょう？こうして、旧約の教えを見ても、新約の教えを見ても教えていることは同じなのです。このように生きなさいとみことばは私たちに教えるのです。主に信頼して主に従って行くこと、もしあなたがそれを継続するならば、主が約束してくださった、あなたの心がいつも喜び続けるということをおあなた自身が経験します。

◎ 主に信頼することを学ぶ

① ヨブと彼の妻

そして私たちはこの主に信頼するということを学ぶことが必要なのです。実はその経験をしたひとりの人物を皆さんに紹介します。皆さんもよくご存じのヨブです。ヨブ記1章にどんな悲しい経験をしたのかが記されています。ヨブの愛する子どもたちが亡くなってしまおうという非常に悲しい経験をします。それだけではありませんでした。彼の健康さえも脅かされました。彼は頭の頂から足の裏まで悪性の腫物で覆われたとあります。愛する子どもたちを失っただけではない、自分自身の健康も損ねて、悪性の腫物でからだじゅうが侵されてしまうような、そのような病を経験するわけです。

ヨブ2:9で、ヨブの妻が「『それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神をのろって死になさい。』」と言います。私たちは、彼女の言っていることに同意しませんけれども、彼女の言っていることは理解できます。彼女はこんな不幸をもたらした神様をいつまで信頼し続けるのかと思ったのです。誰だって、このように愛する者たちがいのちを落としてしまう出来事や神に従いつけている人物がこのような病に侵されてしまう事実を見た時に、一体どんな神様なのだろうと。愛のない、情けのない、ひどい神だ、この神を呪って死んだらいいと。こんなことをもたらすのだったら、神様に復讐したらいいと。しかし、ヨブは2:10にあるように罪を犯すことはなかったと言います。「『私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわざいをも受けなければならないではないか。』」ヨブはこのようになって、罪を犯すようなことを口にしなかった。」と。

この後ヨブの友人たちがやって来ます。彼らはみんな口々に、このような大変な災難に遭ったのはヨブのうちに罪があるからだと言います。ヨブはそれを否定しようとします。そして神の前に説明を求めますが、神様はお答えにならないのです。ヨブ記は1章から37章の終わりまで、ヨブの苦しみがいざいと記されています。そして38章になってやっと神様がヨブにお答えになるのです。でもその神のお答えを見る時に、ヨブ自身が気づいたことは、これは彼が求めていた答えではなかったのです。神は38:4-11で創造のみわざについて教えるのです。38:12-30では、この自然界について神は教えます。38:31-38には星や雲の話が出てきます。そして38:39-39:30を見ると、動物や鳥の話です。ヨブは思ったでしょう、「神様、何ですか、それは。それは私が求めている答えではないです」と。

そして40:6からまた再び「主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。」とあります。そこで「あなたはわたしと同等なのか」と言うのです。そして、その後40:15-24で河馬の話が出てきます。「神様、なぜ河馬の話なのか」と。41:1-10はレビヤタンの話です。レビヤタンを釣り上げることができるかと。説明がありますけれども、恐らくワニの話であろうと思います。なぜこんなことを言われたのか——。ヨブはワニを釣り上げることなんてできない。ワニをコントロールすることができないことを思い知らした上で、主が言われたことは、ワニをコントロールできないあなたが、なぜすべての

ことを支配しているわたしに意見するのかと。なぜわたしを批判したり、指図したり、おかしいと責めたり、なぜわたしをあなたの考えに従うように命じるのか、一体あなたはだれなのかと言うのです。

主はこうしてヨブに、ヨブよ、わたしは大変なことが起こったのは全部知っている、わたしがよしとしたからだ。主がヨブに問いかけるのは、どんな時でも、このような悲惨なつらい状態にあっても、わたしを信頼するかということでした。そしてヨブは主に答えて、

4 2 : 1 - 2 主の御力をいま一度覚えて、その御力にすべてをゆだねようとしませう。

4 2 : 3 - 4 主の知恵をいま一度教えられてその知恵にすべてをゆだねようとしませう。

4 2 : 5 - 6 主のきよさをいま一度覚えて、その方の前に自分の罪を悔い改めようとするのです。

感情的になったことをヨブは主の前に悔い改めます。主のみこころに従わなかったことを。ヨブ記3章には11節に2回、12節に2回、20、22、23節に1回ずつ、この3章中に7回も「どうして(なぜ)」ということばが出てきます。神様どうしてですかとヨブは説明を求めたのです。でも神様はそれにお答えにならなかった。

ある先生はこう言います。我々は約束に立って生きるのであって、説明に立っているのではないと。神様が私たちの問いかけに対してお答えにならなくても神に責任はないのです。神にはそれを説明する必要はないのです。問題なのは、私たちが説明を聞くかどうかに関係なく神を信頼できるかなのです。この全能の神様のなしておられるみわざに信頼を置いて生きるかどうかかなのです。もし私たちが神の前に説明を求めるとするならば、我々はみずからをどんな位置に置いているのでしょうか。この方は神なのです。創造主なのです。我々はただの奴隷にすぎない。ヨブはこのことを学ぶのです。先ほどお話しした先生は、人生の問題は理性によって解決するのではなく関係によると言います。いろいろな問題を抱える時に、「なぜ」と考えて問題を考えるのではない。つまり神様を信頼することによって問題の解決を図ることができるのです。

今私たちがこのみことばを通して教えられていることは、まさにそのことなのです。確かに私たちから「喜び」を奪って行きそうな出来事はいっぱい起こります。つらいことがある、悲しいことがある。でもその中で私たちは「喜び」を持って生きることができるとパウロは言ったのです。そして彼はそのように生きたのです。その秘訣は何だったか——。神を信頼したのです。完全な計画を持ってすべてのことを導いてくださっている神様を彼は信頼したのです。そしてその時に、彼は神の「喜び」をいただきながら生きたのです。主にあって喜ぶのです。主が「喜び」の源なのです。私たちがそのことを学ばなければ、このすばらしい祝福を経験できないまま、この祝福を下さった主にお会いすることになります。そんなことがあってはいけません。今この「喜び」を持って生きることができると言っています。いろいろなことを経験していても、主のみこころがなされることを期待して、しっかり主を見てください、信頼してください。ヨブはこんな大変な境遇にあっても、主を信頼することを学びました。そして神は彼を豊かに祝した。

② モーセと姉

ここにもうひとりの例があります。

残念ながら彼女は主に信頼を置かなかったのです。あのモーセのお姉さん、ミリヤムの話です。民数記12章の中にそのことが出て来ます。モーセの兄弟、ミリヤムとアロンは不満を漏らすのです。民数記12:1-2に、「そのとき、ミリヤムはアロンといっしょに、モーセがめとっていたクシュ人の女のことで彼を非難した。モーセがクシュ人の女をめとっていたからである。」「彼らは言った。『主はただモーセとだけ話されたのでしょうか。私たちとも話されたのではないのでしょうか。』主はこれを聞かれた。」とあります。1節で、クシュ人の女性をめとっていたことを彼らが責めたと記されています。でもクシュ人の女をめとることが、主のみこころに反していたかということ、そうではないのです。出エジプト34:11を見ると、「エモリ人、カナン人、ヘテ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人を」追い払いなさい。つまりこういう人々の間から妻をめとってはいけなさと、確かにみことばは教えているのです。でもモーセがめとったクシュ人の女性に関しては教えられていない。ではなぜ彼らがこんなことを引き合いに出したのか。2節にそのヒントがあります。彼らはモーセだけが用いられているとねたみを覚えたのです。ある聖書学者たちは、もしかしたらモーセがめとったこのクシュ人の女性が、イスラエル民族の中で中心的な存在だったミリヤムの地位を脅かすような存在になるのではないかと懸念した、心配したのではないかと述べています。そうだったのかもしれない。いずれにしてもこのミリヤムという女性は、モーセの兄アロンと一緒にあって「主はただモーセとだけ話されたの」と言って不満を言ったのです。

主なる神はモーセを選ばれたのです。モーセを立てられ、モーセを用いて主のわざをなしたのです。それに対して彼らは信頼できなかつた。そこで不満を言った時にどうなったのかを12章のみことばが私たちに教えます。主はこのミリヤムをさばかれたのです。らい病にかかりました。それでもモーセは彼女のために祈り、彼女は癒されました。しかし残念なことに、イスラエルの民はこのことですぐに出発することができなかつたのです。神のなしておられるみわざを信頼できなかつた。自分が納得できな

かった。自分が受け入れることができなかった。

結論

さて、私たちはきょうみことばから、この「喜び」というのは主からの賜物であると教えられました。パウロは主にあって喜べと言いました。主が「喜び」の源なのです。その主が私たちにその「喜び」を賜物として与えてくれると。この「喜び」は主への信頼によって得ることができるのだと。

そしてピリピ人への手紙を見ますと、パウロは主なる神がどのような方であることを6つ教えています。

- (1) 内住の主：信者のうちに住んでくださっている神 1:6
- (2) 失敗を犯されない主：間違いのない神 1:12
- (3) いのちの主 1:20
- (4) 励ましの主 2:1
- (5) さばきの主 2:16
- (6) 養い主なる主：この方は私たちが養ってくださる 4:19

こうしてパウロは我々の神がどんな神であることを教え、だからどんな状況でも主を信頼し続けて行きなさい、そしてその時この祝福があなたのものになると読者たちに言うのです。

信仰者の皆さん、あなたはどんなふうに進んでいらっしゃいますか？「喜び」を持って生きる、これは実現可能な命令です。そしてパウロは私たちにどうしたらそれを実現することができるかを教えてくれました。どんな時でも、今あなたが置かれているその状況の中で、完全な知恵を持ってあなたを導いてくださっている主を信頼することです。あなたが今置かれている大変苦しい状況、その試練、それはあなたを成長させるためであり、そして神はその状況を使ってご自身の栄光を現わそうとしています。だから、信頼することが必要なのです。どうぞそのようにして歩み続けてください。そしてその時にこの約束をあなたのうちに果たしてくださった、神様をあなたが崇めるだけでなく、その主のみわざを見たすべての人々が神を崇めるようになります。そのようにして生きて行きなさいとみことばが教えます。どうぞそのように歩んでください。そしてこの神様のすばらしさをぜひ多くの人々にこの1週間も示し続けてください。

《考えましょう》

1. 「聖書の教える喜び」とは、どのようなものかをあなたの言葉で書いてください。
2. クリスチャンがすぐに「喜び」を失ってしまうのはどうしてでしょう？
3. 喜びを失わないためには、どうすれば良いかを書いてください。
4. あなたはきょうの学びを通して、どのような決心を主に對してなさいましたか？